福島県郷土資料情報

No.５７　２０１７．３

編集・発行：福島県立図書館
〒960-8003　福島市森合字西養山1
Tel 024-535-3218
Fax 024-536-4787
http://www.library.fks.ed.jp/

『若松領分猪苗代城絵図』

目　　　次

特集　ふくしまの城・城絵図　・・　1

平成28年度「ふくしまを知る連続講座」報告（第２回～第４回）・・・・・・・・・・　10

福島の児童文学者　40　・・　13

福島県関係書誌の紹介　2016　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19

特集

ふくしまの城・城絵図

棚倉城、小峰城の築城に大きな功績を遺した丹羽長重（1571-1637）が逝去してから、今年でちょうど380年。『日本城郭大系 第3巻』（創史社 1981）によれば、県内には大小含め1,125の城館が存在したとされています。戦火や明治の廃城令等により当時の建造物はほぼ失われていますが、会津若松城（鶴ヶ城）をはじめとする歴史上の舞台となった城々は堀や石垣等が復元・整備され、現在も重要な史跡として人々に親しまれています。

今回の特集では、県内にかつて存在した城々を、当館所蔵の「城絵図」とともにご紹介します。城郭のみならず城内外の構造が一目で分かる「城絵図」を、築城された場所や理由、戦いの歴史と合わせてご覧ください。なお、当館では平成29（2017）年4月7日（金）～30日（日）にかけて、企画展示「城絵図展～ふくしまの城絵図を中心に～」を開催します。城絵図の現物を直接見ることができる数少ない機会ですので、ご来館いただければ幸いです。

（地域資料チーム　阿部　誠）

棚倉城

所在地：東白川郡棚町棚倉　別称：近津城，新土城，亀ヶ城
種別：台城　規模：総面積 72,270 ㎡，標高 375m

【築城】

元和 8（1622）年に棚倉五万石を拝領した丹羽長重が、幕命を受け寛永元（1627）年より築城に着手しました。寛永 4（1630）年にほぼ完成しますが、未完のまま丹羽家が白河へ移封したことから、明治維新まで城壁が荒土のままとなってしまいました。別称としては近津明神の跡地に建てたことから「近津城」、壁が荒土のままであったことから「新土城」、お堀に住む大亀が水面に浮かぶと決まってお殿様が転封されたことから「亀ヶ城」等があります。

【近世～戊辰戦争】

棚倉城は丹羽氏の築城以来 8 家 16 代に渡って城主が変遷し、16 代目の阿部正静の代に戊辰戦争を迎えます。棚倉藩は奥羽越列藩同盟に参加し新政府軍を迎え撃ちますが衆寡敵せず、慶応 4（1868）年 6 月 24 日、わずか 1 日で落城しました。

【現在】

本丸および水掘が亀ヶ城公園として整備されており、本丸の堀・土塁がきれいに残存しています。

【当館所蔵絵図】

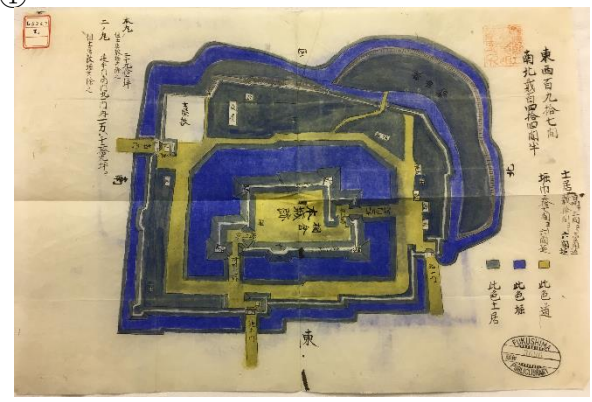
①『棚倉城郭絵図』〔出版者・出版年不明〕
26×40cm

棚倉城の廃城後に描かれたと見られる城跡周辺の絵図です。道・堀・土居が色分けされている他、本丸・二ノ丸の面積や東西・南北の長さの記載があります。

②『棚倉城外地割絵図』
〔出版者・出版年不明〕　74×133cm

①と同じく廃城後の絵図と見られます。本丸跡を中心とした地割図で、城下町の屋敷・丁掘・土居・堀川・道・寺院・町が色分けされている他、貸地や未割付の区画にはその旨を書いた紙片が貼付されています。

①



②

小峰城

所在地：白河市郭内　別称：白河城
種別：平山城　規模：不明

【築城】

『白河風土記』によれば、興国～正平年間（1340～1369）の頃、白河庄を治めていた結城宗広の嫡男親朝（別家小峰家を興す）が築城したとされています。

【中世】

永正 7(1510)年に起こった「永正の変」により、小峰家の血統による「白河結城氏」が創設され、結城氏の本拠もこの頃白川城から小峰城へと移りました。その後天正 18（1590）年の奥州仕置による結城氏の改易や蒲生氏、上杉氏の支配を経ながら、小峰城および白河城下の骨格が出来上がっていきます。

【近世】

寛永 4（1627）年、丹羽長重が棚倉より十万余石で移封し、白河藩が成立します。長重は幕命により同 6（1629）年から約 4 年の歳月をかけて小峰城の大改修を行いました。行われたのは堀の整備や本丸・二の丸の総石垣化等で、北奥羽の外様大名に対する押えの城としての重要な位置づけであったことが分かります。

江戸後期には松平定信が二ノ丸、三ノ丸を整備し、蔵や役所等の公的施設を置きました。また、約 5 年の歳月をかけて三ノ丸東側に広大な屋敷地を造成し、御殿や庭園からなる「三郭四園」を造り上げています。

【戊辰戦争～現在】

小峰城は慶応 4（1868）年に戊辰戦争白河口の戦いで落城・焼失し、廃城となります。城跡には曲輪・土塁・石垣・水掘を残すのみでしたが、平成に入ると三重櫓や前御門が復元され、平成 22（2010）年には国の史跡に指定されました。翌年の東日本大震災によって曲輪・石垣が大きな被害を受け、本丸が立入禁止になりますが、修復作業を経て平成 27（2015）年 4 月から入城可能となり、現在も石垣の修復が進められています。

【当館所蔵城絵図】

①『陸奥国白川城之図』〔出版者・出版地不明〕1779 27×13cm

当時の小峰城を描いたもので、本丸北方の石垣が高さ十二間、横十八間に渡って崩落した際の記録であることが読み取れます。「松平越中守」の名前も見られます。（裏表紙画像）

②『白河旧城内図面并上申書』
〔出版者不明〕1876
28cm（冊子）　50×70cm（絵図）

冊子体の資料で、城跡および城下町の図面が複数綴じられています。

②

二本松城

所在地：二本松市郭内　別称：霞ヶ城，白旗城
種別：山城⇒平山城　規模：標高 345m，比高 120m

【築城】

二本松城の築年に関しては諸説ありますが、応永 21（1414）年に畠山氏 4 代・満泰が築城したとの説が有力です。奥州探題であった満泰は当時居館であった田地ヶ丘の館では攻防に不適と考え、東方にある霧山、白旗ヶ峯の山上に城を築き拠点としました。南・西・北方を丘陵に囲まれた天然の要害であり、その規模は東西 2.5km、南北 1.8km といった広大なものでした。

【中世～近世】

二本松城は、天正 14（1586）年に畠山氏と伊達氏との戦の末落城、畠山氏自らの手によって本丸に火が放たれています。その後蒲生氏や加藤氏の支配を経て、寛永 20（1643）年に二本松入府となった丹羽氏によって本丸や石垣等の大改修が行われ、以後改修を重ねながら明治維新までの 200 年以上に渡り、丹羽氏の居城となりました。

【戊辰戦争～現在】

戊辰戦争の戦火により城や城域内の建物はほとんどが焼失・破壊され、残る建物も明治 5（1872）年の廃城令によって取り壊されましたが、昭和 57（1982）年、箕輪門と附櫓が復元されました。また、平成 5（1993）年から平成 7（1995）年にかけて本丸の修復、復元工事がなされ、天守台や本丸石垣が整備されています。平成 18（2006）年には国の史跡に指定されました。

【当館所蔵城絵図】

①『二本松旧城内之全図』安斎嶂渓／製図
安斎嶂渓 1902 40×55cm

明治期に描かれた、旧二本松城および城下の絵図です。城はこの時期には取り壊されており確認できませんが、石垣や山頂の城跡、御殿等の建物の配置が細かく描写されています。

①

福島城

所在地：福島市杉妻町　別称：杉目城，大仏城
種別：平城　規模：400m×300m

【築城】

築城の時期は定かではありませんが、古代末期には信夫庄司佐藤一族の杉ノ目太郎行信の居館があったと『信達一統志』には記されています。また、その後の史料には伊達氏の支配する城として15世紀始め「大仏城」と呼ばれていた城が、天文22（1553）年には「杉目（杉妻）城」と改められていることが確認できます。

【中世】

蒲生氏郷家臣の木村吉清が居城を大森城から杉目（杉妻）城に移した際に「福島城」と改名しました。ただしこの城は豊臣秀吉の命令で文禄4（1595）年に取り壊され、堀や土塁のみが残されました。

【近世】

延宝7（1679）年、本多忠勝の子孫忠国が福島十五万石に転封となり、福島藩が独立。これに伴い福島城も支城から本城となります。この頃は天守のない陣屋構えの造りでしたが、堀田氏の時代に普請が本格的に始められ、元禄15（1702）年～明治2（1869）年にかけての板倉氏時代には御殿や大手門をはじめとした城と城下町が大きく整備されました。

【戊辰戦争～現在】

戊辰戦争時、福島藩は奥羽越列藩同盟に加盟して新政府軍と戦いますが、明治元（1868）年9月2日に11代藩主板倉勝尚が新政府軍に降伏し、福島城を開城します。その後福島藩は消滅。堀等は壊され、二ノ丸跡を中心に福島県庁が建設されました。

城跡は現在も福島県庁の敷地内に存在しますが、建物は勿論、遺構もほとんどが消滅してしまっており、辛うじて庭園跡や土塁が残存している状況です。

【当館所蔵城絵図】

①『福島旧城之図』福島県土木掛／編
福島県〔写本〕1875 18×13cm

福島県が誕生する前年のもので、「福島県土木掛福田正介写」と署名された実測図です。シンプルな絵図ですが、三ノ丸が取り払われている様が見える等、廃城の経過が分かる図となっています。

②『福島旧城郭絵図』〔出版者不明〕〔写〕〔明治初期〕116×134cm

表書きには絵図名と共に「仙台鎮台三好陸軍大佐へ相廻之候控也」とあります。絵図には建屋・土手・川・道が色分けされて描かれ、敷地内の立木本数が記載された紙片が貼付されています。

①

②

相馬中村城

所在地：相馬市中村　別称：馬陵城，夫館
種別：平台城　規模：（本丸）28m×112m

【築城】

『奥相志』によれば、大永年間（1521～1527)、宇多荘を統治していた「中村某」が樵夫の勧めで天神山に城普請を始めたのが相馬中村城のはじめとされています。樵夫が見立てた城であることから、当初は「夫館」と称しました。

【中世～近世】

相馬中村城は当初伊達氏に属する城でしたが、相馬氏 14 代相馬顕胤が天文 12（1543）年に支配下としました。その後慶長 7（1602）年から 10 年間の空城期間を挟み、慶長 16（1611）年 7 月より陸奥相馬中村藩初代藩主の相馬利胤が修城。同年 12 月には本拠を小高城から相馬中村城へ移し、その後廃藩までの約 260 年間、相馬氏の居城となります。当初は 3 層の天守が存在しましたが、寛文 10（1670）年に落雷によって焼失しています。

【戊辰戦争～現在】

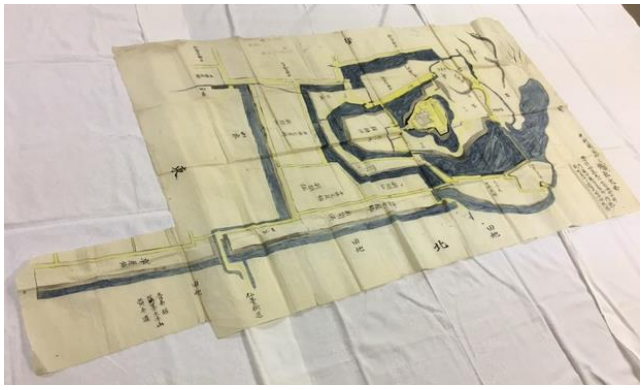
相馬藩は奥羽越列藩同盟に加わり棚倉や平で新政府軍と戦いましたが、慶応 4（1868）年に降伏したため相馬中村城は戦火を免れています。城郭は明治 3(1870) 年、新政府の命により廃城となり、城内の建物は全て破却されました。現在、城跡周辺は「馬陵公園」として整備され、大手門・石垣・土塁・堀が現存しています。

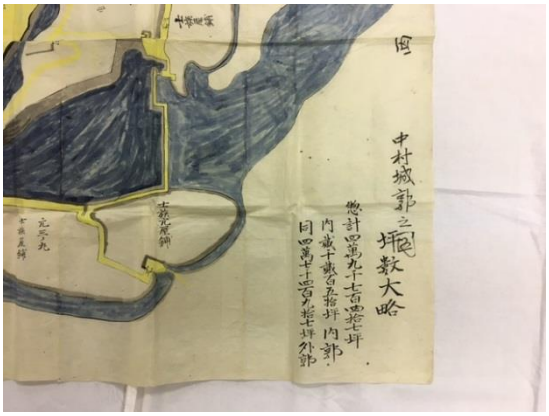
【当館所蔵城絵図】

①『中村城郭之図』[出版者・出版地不明]
200×340cm

標題とともに敷地面積（総面積・内郭・外郭）が併記されています。また本丸の間取りが細かく描かれており、広間等の位置も見られます。城外は区域ごとに士族屋敷, 町屋等の使途が記載されており、元の二ノ丸が繰練所となっている事等も確認できます。

①





磐城平城

所在地：いわき市平　別称：飯野城，龍城
種別：台城　規模：700m×500m

【築城】

関ヶ原の戦い後、岩城氏に替わって慶長 7（1602）年に鳥居忠政が磐城へ入府します。忠政は「磐城には館はあっても城はないので適当な場所を見立てて城を築くように」との徳川家康の命を受けて、慶長 8（1603）年に築城を開始しました。完成までには 12 年もの年月がかけられ、盲人までもが使役されたといいます。平城に天守はなく、それに相当する「三階櫓」が建てられました。また城中央の水堀「丹後沢」は、堤防工事が難航した際に、「丹後」という老人を人柱に立てたことから名づけられたと伝えられています。

【近世～戊辰戦争～現在】

磐城平藩初代藩主の鳥居氏が元和 8（1622）年に新城構築等の功績で山形転封になった後は、内藤氏・井上氏・安藤氏と藩主を交代しながら幕末を迎えます。

戊辰戦争においては、磐城平藩は奥羽越列藩同盟に加盟し、平城も戦場となりましたが、激しい攻撃の前に慶応 4（1868）年 7 月 14 日陥落。城には守備隊によって火が放たれました。

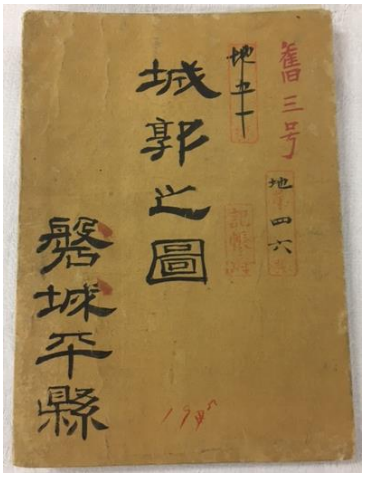
現在では本丸跡地は私有地のため、イベントが開催される際等に期間限定で公開されており、旧仮藩庁や三階櫓跡、石垣等が見られます。

【当館所蔵城絵図】

①『平城郭之図』〔出版者・出版年不明〕
75×80cm

城内の建物・石垣・堀等が、それらの規模を現す数字とともに色鮮やかに描かれています。また複数の紙片が貼付されており、戊辰戦争による焼失等の被害状況や、廃城後の土地の使途等の記載があります。

①



猪苗代城

所在地：耶麻郡猪苗代町　別称：亀ヶ城
種別：山城　規模：標高 550m，比高 28～30m

【築城】

猪苗代城は、佐原経連を初代とする猪苗代氏が代々居城にしたとされています。その築城年代については一般に建久 2(1191)年と言われていますが、会津地方の城館や柵をまとめた『会津古墨記』(文化 10(1813)年写)等後世の文献からの引用であり確証がなく、城跡の構造や出土遺物、『塔寺八幡宮長帳』等の古文書における猪苗代氏及び修復入城に関する記事から、現時点では南北朝から室町期にかけて築城されたものと考えられています。

【中世】

伊達政宗に関する記録『貞山公治家記録』において、天正 17（1589）年に伊達家と蘆名家の間で行われた摺上原合戦の場面で猪苗代城の名が登場します。猪苗代氏の支配は、伊達氏が会津を没収されるまで約 400 年間続きました。

【近世～戊辰戦争】

近世になると江戸幕府より一国一城令が発布されますが、猪苗代城は会津若松城の支城として存続が認められ、領主の有力家臣が城代として置かれました。また城の北にある見祢山土津神社には会津藩の藩祖保科正之の墓があり、墓守りが城代の重要な役割のひとつでした。戊辰戦争においては、慶応 4（1868）年 8 月 22 日、新政府軍が母成峠を突破したことを知った城代高橋権太夫が防御に不利と見て城を自焼し、土津神社にも火を放って若松に退去しています。

【近代～現在】

明治 38（1905）年、小林助治・才治父子を中心とした町内の有志が、私財を投じて城跡に桜やツツジを植栽し、東屋や観月橋を設けて公園として整備しました。現在は、平成 9（1997）年度より総合公園として再整備され「亀ヶ城公園」として利用されています。

【当館所蔵城絵図】

①『若松領分猪苗代城絵図』〔出版者・出版年不明〕160×196㎝

城内の区割及び土地の使途、建物・門・石垣・堀等の位置が詳細に分かる絵図です。山上に建てられた本丸や、城のみならず城下町の周囲にも張り巡らされている堀の様子が確認できます。城の北方には巨大な磐梯山が描かれており、存在感を放っています（表紙画像）

参考資料一覧

・『ふくしまの城 歴春ふくしま文庫 57』鈴木啓／著 歴史春秋出版 2002

・『図説 城と石垣の歴史』鈴木啓／著 纂修堂 1995

・『日本城郭大系 第 3 巻 山形・宮城・福島』平井聖／[ほか]編集 新人物往来社 1981

・『白河市史 第 10 巻 各論編』白河市／編・刊 1992

・『福島県史料集成 第 4 輯 白河風土記』福島県史料集成編纂委員会／編 福島県史料集成刊行会 1953

・『白河歴史の手引き れきしら　入門編』白河市建設部都市政策室まちづくり推進課／編・刊 2013

・『白河歴史の手引き れきしら　上級編』白河市建設部都市政策室まちづくり推進課／編・刊 2015

・『史跡 小峰城跡 保存管理計画書』白河市教育委員会／[編]・刊 2015

・『史跡 小峰城跡 整備基本計画書』白河市教育委員会／[編]・刊 2015

・『丹羽長重と小峰城』白河市歴史資料館／編・刊 1990

・『小峰城石垣』山口喜一郎／著・刊 1984

・『棚倉城』棚倉町教育委員会／編・刊 1987

・『棚倉町史 第 1 巻』棚倉町教育委員会／編 棚倉町 1982

・『二本松市史 第 9 巻 各論編』二本松市／編・刊 1989

・『二本松城 築城から廃城まで』二本松市歴史資料館／[編]・刊 2014

・『二本松市史 第 9 巻 各論編 2』二本松市／編・刊 1989

・『幻の福島城 歴春ブックレット信夫 3』村川友彦／著 歴史春秋出版 2016

・『福島城の変遷と構造』鈴木啓／著［福島板倉温故会］2002

・『中世の福島 福島城と板倉家』福島市資料展示室／編・刊 2003

・『福島市史資料叢書 第 30 輯 信達一統志』福島市史編纂委員会／編 福島市教育委員会 1977

・『史跡中村城跡保存管理計画書』相馬市教育委員会／編・刊 1996

・『福島県史跡中村城跡・外大手一ノ門修理工事報告書』
文化財建造物保存技術協会／著・編 中村城外大手一ノ門復元実行委員会 1993

・『相馬市史 4 資料編 1 奥相志』相馬市／編・刊 1969

・『相馬郷土 第 8 号』相馬郷土研究会 1993　p1-p6「中村城の沿革と価値」岩崎敏夫／著

・『平城跡 中・近世城館跡の調査 いわき市埋蔵文化財調査報告 第 117 冊』
いわき市教育文化事業団／編 いわき市教育委員会 2006

・『平城跡 旧外堀跡の調査 いわき市埋蔵文化財調査報告 第 127 冊』
いわき市教育文化事業団／編 いわき市教育委員会 2008

・『いわき市史 第 6 巻 文化』いわき市史編さん委員会／編 いわき市 1977

・『磐城文化史』諸根樟一／著 国書刊行会 1986

・『会津坂下町史 2 文化編 塔寺八幡宮長帳』会津坂下町史編さん委員会／編 会津坂下町 1976

【未見】

・『示現寺文書』（示現寺／蔵）

・『異本塔寺長帳』『白河証古文書』（内閣文庫／蔵）

平成 28 年度「ふくしまを知る連続講座」第 2 回

『引札』が語る商業のまち 福島の歴史Ⅱ

講師：柴田俊彰氏（福島市史編纂室）

開催日：平成 28 年 10 月 23 日（日）　参加人数：40 名

堺屋作太郎・福島市柳町［福島市教育委員会蔵］

本講座は 10 月 7 日(金)～11 月 3 日(木)に当館展示コーナーで開催された「ふれあい歴史館移動展 引札Ⅱ」の関連講座として行われました。

「引札」の語源は「客を引く」説と古くは配ることを「引く」と言い「配る札」説があり、商店が開店や商品売り出しのために顧客に配った印刷物で、現在のチラシに相当するものです。始まりは宝永年間(1704-1710) と言われ、近世から近代の商業を知る重要な手がかりとなります。さらに、アートとしての見方や印刷技術の発達を見ることも出来ます。

きよ松商店・飯野町［福島市教育委員会蔵］

描かれているのは、福の神など縁起のよいものや当時の世相や関心が色濃く反映したもの、歴史上の人物、暦など役に立つ情報、様々なものをモチーフに作成されています。なかでも商店が年末年始に顧客に新年の挨拶を込めて配った「正月用引札」は色鮮やかな一枚摺りのもので数多く出回りました。

引札に影響を与えたもの一つに活版印刷の導入が挙げられます。明治 30 年前後から大阪や東京の大きな印刷所が見本帳を作り各地の印刷所へ送り注文を取ったもので、地元印刷所ではそれに店名や商品名・住所などを刷り込んで販売するようになりました。当時の地元 福島にあった印刷所をいくつか紹介します。

喜多屋呉服店・福島市大町［古関裕而記念館蔵］

「竹内活版舎」は創業明治 16 年、福島民報の創刊号から第 7 号までを印刷し、伊達郡安達郡大沼郡など広範囲に営業を展開していました。「山口保命堂」は創業明治 20 年、売薬業を行っていたので薬の袋を印刷するために印刷業を兼営し、県内初の石版印刷を始めました。「共益舎」は明治 25 年、福島町役場助役にあった旧会津藩士 草刈三郎が知人と共同で開業し、その後活版印刷も始めました。印刷所と商店の関係から流通が広域的に行われていた実態がわかります。

引札は、庶民の購買力が向上しつつある経済の発展に伴い当時の人々のニーズを映す鏡として貴重な史料と言えます。

（地域資料チーム　原馨）

第３回

医学者・野口英世を支えた人々
～感謝とともに成長～

講師：森田鉄平氏（野口英世記念会）

開催日：平成 28 年 11 月 19 日（土）参加人数：20 名

2016 年の野口英世の生誕 100 周年を記念して、当館では 11 月 5 日（土）～12 月 27 日（火）の約 2 か月間、野口英世関連所蔵資料の展示を行いました。この展示では野口英世を支え、助けた人たちの紹介と、野口英世の学術的業績をテーマに展示資料を選定しました。

展示期間中の 11 月 19 日、猪苗代町にある野口英世記念館の学芸員、森田鉄平氏を講師にお迎えし野口英世本人の生涯と、家族、恩師、友人たちとの関わりについてご講演いただきました。

野口英世を支えた人物として、まず思い出される母・シカ。彼女は幼いころから奉公に出て家計を支えるなど大変苦労して育ったこと、英世が成長したのちは、産婆の資格をとって 2000 人あまりの子どもを取り上げたこと、観音様を深く信仰し、英世が帰国した際の願いは中田観音に一緒に参拝してもらうことだったなど、英世の母としてだけではないシカ自身の人生や彼女の性格の伝わってくるお話しでした。さらに小林栄、渡部鼎、サイモン・フレキスナーなど、英世の人生の重要なポイントで彼を支えた恩師たちについてのお話や、英世の火傷をした左手が写った貴重な写真の紹介もありました。参加者アンケートでは「野口英世についてよりよくわかるようになった」「英世を身近に感じるようになった」といった感想をいただきました。

（地域資料チーム　田中信乃）

第４回

名所図会の世界
～ふくしまゆかりのものを中心に～

講師：渡邉智裕氏（福島県歴史資料館 副主幹兼専門学芸員）
開催日：平成 29 年 1 月 22 日（日）参加人数：44 名

本講座は、1 月 6 日（金）から 2 月 12 日（日）にかけて当館の展示コーナーで開催された、「名所図会の世界―江戸時代の観光ガイドブック―」（歴史資料館移動展）の関連講座です。江戸時代の名所図会出版の歴史とその意義を概観し、福島県ゆかりの名所や人物を取り上げている資料を、画像を見ながら詳細に解説していただきました。

名所図会は、江戸時代後期に盛んに出版され、寺・神社、歴史的名所、名勝地、特産物等が描かれています。1 枚ものではなく和本の形式で、当時のことを知ることができる資料です。以下、講座で取り上げられたもののうちいくつかを紹介します。

『名山図譜』は、陸奥国南部の医者川村元善（錦城）の編で文化元（1804）年秋に刊行された日本の名山に関する図録集です。絵は白河藩のお抱え絵師だった谷文晁により、一部弟子の白雲が描いたものも含まれていたと言われています。描かれている 87 座 88 図のうち、福島県関係は、半田山、磐梯山、吾田多良山、小野岳、二股山、朝日岳の 6 図あります。文化 9（1812）年に元善子息の川村博が『名山図譜』に 2 図を増補し、新たに刊行したのが**『日本名山図会』**です。

『山水奇観』は、全国の著名な山水に関する名所図会です。寛政 12（1800）年、享和 2（1802）年に刊行されたもので、著者は淵上旭江（禎）です。写実的な山水図に関連する漢詩が添えられているのが特徴です。福島県関係は東山道に含まれており、後編三巻には柳津が描かれています。

名所図会の中には、**『江戸名所図会』**など比較的知名度の高いものがある一方、『山水奇観』**『二十四輩順拝図会』**など福島県内でこれまであまり注目されてこなかった資料もあります。その他、奥州の歌枕が多く取り上げられているなど文学に重点を置いた『東国名勝志』や、東国の名所に関する随想集で、地の文（解説文）が特徴的である『東国旅行談』などがあり、それぞれの資料の特徴に注目して見ていくと興味深いものです。

『日本名山圖會 巻一』より 磐梯山
（谷文晁／著 千鍾房 1804）

（地域資料チーム　二階堂千紘）

福島の児童文学者　４０

長田（おさだ） 弘（ひろし）（１９３９－２０１５）

詩人。1939（昭和 14）年 11 月 10 日、福島県福島市新町に生まれる。3 人兄弟の長男。弟のひとりは翻訳家として著名な青山南氏。4 歳のときに父母のもとを離れ、福島県岩代熱海（現郡山市磐梯熱海）の母の実家に疎開する。1945（昭和 20）年、5 歳のときに福島県三春町に転勤した父母のもとに戻る。1946（昭和 21）年、三春町三春小学校に入学する。1949（昭和 24）年に福島市に移り、小学 4 年生から瀬上小学校転校。同年 9 月に福島大学福島師範学校附属小学校（現福島大学附属小学校）[1]に編入する。1952（昭和 27）年福島大学学芸学部附属中学校（現福島大学附属中学校）に入学。1955（昭和 30）年、福島県立福島高等学校入学。1958（昭和 33）年上京し、遊学。1959（昭和 34）年、早稲田大学第一文学部独文専修に入学。在学中に同級生、関根久男と詩誌『鳥』を発刊。1963（昭和 38）年に大学を卒業し、同年 4 月に独文専修の同級生と結婚。1965（昭和 40）年に第一詩集『われら新鮮な旅人』を出版する。1968（昭和 43）年に長男が、1970（昭和 45）年に次男が生まれる。詩、エッセー、翻訳などの執筆活動の傍ら、東京造形大学、早稲田大学、中央大学で非常勤講師も勤めた。子どもの本に造詣が深く、東京新聞・中日新聞などに連載していた絵本・児童文学にまつわるエッセイが没後『小さな本の大きな世界』（クレヨンハウス 2016）として発行された。

エッセー集『私の二十世紀書店』（中央公論社 1982）が第 36 回毎日出版文化賞、詩集『心の中にもっている問題』（晶文社 1990）が第 1 回富田砕花賞、第 13 回山本有三記念路傍の石文学賞を受賞。詩文集『記憶のつくり方』（晶文社 1998）で第 1 回桑原武夫学芸賞、絵本『森の絵本』（講談社 1999）で第 31 回講談社出版文化賞、詩集『幸いなるかな本を読む人』（毎日新聞社 2008）で第 24 回詩歌文学館賞、詩集『世界はうつくしいと』（みすず書房 2009）で第 5 回三好達治賞を受賞。

2015（平成 27）年 5 月 3 日、75 歳で逝去。

子どものときの記憶

長田弘は 1979 年に福島県立福島高等学校での講演で、「わたしは、戦争のときいまの磐梯熱海に疎開し、戦争が終わって三春に移って小学校にはいって、小学校四年生のとき福島に戻りました。わたしの場合、わたしの考え方、感じ方をつくったのは、みなさんとおなじようにして、高校時代までを過ごしたこの福島の街の毎日でした。」[2]と語っている。実際に、高校卒業まで過ごした福島での子ども時代の記憶を長田弘は数多く綴っている。三春小学校の同級生には、登山家の故 田部井淳子（1939-2016）がいた。

戦後の新制小学校の最初の一年生としてわたしが入学した小学校は、東北の山

あいの丘のてっぺんにある小学校でした。ですから、わたしにとって戦後という時代の記憶は、長い急な石段を息を切らしてのぼっていった幼い記憶にはじまるんです。そのときの毎朝一緒に息を切らして長い石段をのぼっていった幼い同級生の一人に、あとで知ったのですが、エヴェレストに日本人の女性として初登頂した田部井淳子さんがいました。[3]

「最初の友人」ができたのも、三春小学校であった。川に渡された水道管を歩いてわたるという危険な遊びを密かに共にした友人は、長田弘が福島市に移って一週間後に、一人で遊んでいて川床に転落し、この世を去ったという。長田弘は「わたしの最初の友人の、わたしは最後の友人だった。」[4]と記している。

4 年生のときに 1 学期だけ通った瀬上小学校については、「一枚の記念写真もなく、何も覚えていない。ただ通学した小道は覚えていた。」[5]という。後年、その地に訪れこう綴っている。

小道にそって小川が流れていた。その小川がいまも流れていた。春の日差しをうつす小川は、細かく光りの粒を散らし、小さな流れがこっちにぶつかり、そっちにぶつかって、小道にならんでつづく。その川面のかがやきに、幼い日の記憶がそのままにのこっていた。

あとにのこるのは、或る時の、或る状景の、或る一場面だけだ。こころにそこだけあざやかにのこっている或る一場面があって、その一場面をとおして、そのときの日々の記憶が確かなものとしてのこっている。そこだけこころに明るくのこっているものだけが手がかりというしかたでしか、過ぎさったものはのこらない。日々に流れさるもののかなたでなく、日々にとどまるもののうえに、自分の時間としての人生というものの秘密はさりげなく顕れると思う。[6]

福島大学学芸学部付属中学校（現福島大学附属中学校）については、次の記述がある。

記憶は、感情よりも、具体的な場所や状景に、はるかに深く根ざしている。そのときどんなことをして毎日を過ごしていたか、何一つ正確におもいだせないのに、中学の三年を過ごした木造校舎のすみずみまで、いまもなお正確におもいだすことができる。そのとき夢中になっていたはずのことを何一つ覚えていないのに、そのときの先生の姿勢や友人たちの表情は、木造校舎の記憶の光景のなかに、いまもはっきり浮かんでくる。[7]

「かなわないと知っている。けれども、もう一度ゆきたい場所は、もう二度とゆくことのできない場所だ。」[8]とし、学校について綴っている。

学校。丘の段々ごとに校舎が分かれていた、丘の上の最初の小学校。まわりぜんぶ林檎畑に囲まれていた、転校していった小学校。中庭にはおおきな池が、校庭にはおおきな藤棚があった、卒業した小学校。

外壁の独特の横板がうつくしかった、古い木造校舎の中学校。そして、ひときわおおきな欅の木がおおきな枝々をいっぱいにひろげていた、長い長い板張りの、木の廊下のつづく高校。[9]

福島の同じ学校を母校とする人たちの中には、表現された文章の中に同じ校舎を思い描き、同様に「いまでも、そのときその学校でおなじ季節を親しく共にした一人一人の顔を、鮮明に、少年たち、少女たちの表情のままに覚えている」[10]人が多数いるのではないだろうか。長田はこう記す。

学校ほど故郷のイメージを叶える場所は、たぶんないのだ。[11]

絵本、そして絵本の翻訳

言葉で表現された作品の中には、絵本の形で表現されたものもある。

言葉の美しい「音」で世界が広がっていく絵本に、『空の絵本』、『ん』がある。「こころという にわにそだつ いっぽんの ゆめのき」を描いた『ねこのき』、「だいじなものは 何ですか？　たいせつなものは なんですか？」と問いかける『森の絵本』、そして「今日、あなたは空を見上げましたか。」ではじまる詩『最初の質問』は、中学3年の国語教科書に採用され、絵本にもなった。心に直接問いかけてくるような言葉の絵本である。その他、「だんだん」という言葉で時と自然の変化を表現した『空の絵本』、言葉の表情をとらえた『ん』など、言葉の音をすくいあげた作品がある。この「ん」という言葉は、長田弘にとって福島の方言につながる特別な言葉であったようだ。「福島の辺りでは「ん」は基本語。ものすごくたくさん「ん」が、文頭にくるんです。大学から家ごと福島を離れてしまいましたが、いちばん変わったことは何かというと、自分の暮らしのことばのなかに「ん」がなくなったこと。」[12]と語っている。

また、児童文学作品も遺している。自分が今何をしたいか教えてくれるおとうさんの“しましまの帽子”を描いた『帽子から電話です』（長新太/絵 偕成社 1974）がある。おとうさんがどこかに忘れてくる度に、帽子自らが電話をかけてくる。最後に帽子が行き着いたところが自由の女神であるところに、独特のユーモアが感じられる。

長田弘はジョン・バーニンガムの『地球というすてきな星』、『旅するベッド』、シルヴァスタインの『めっけもののサイ』などの著名な原作者による作品や、戦火から図書館の本を守った実話にもとづく『バスラの図書館員』や、ビアトリクス・ポターの伝記絵本『ビアトリクス・ポターのおはなし』など、数多くの絵本や児童文学の翻訳にも携わ

った。そして、自らが編集・翻訳した「詩人が贈る絵本」シリーズにおける選定理由について、「この絵本を手にしたという記憶を、できるだけおおくの人と共有したかったから」と記している。これは、彼が翻訳した絵本すべてに通じることではないだろうか。

10 歳のときにアメリカ文化センター[13]で出会った絵本『The little house（ちいさいおうち)』[14]が最初のアメリカ経験だと、長田弘自身が記している[15]。後年、彼は『ちいさいおうち』を、「絵本というのはこれだけのことができるんだというおどろきをおぼえずにいられない絵本です。たった四十ページの小さな本なのに、その小さな本のなかには、「ちいさなおうち」の生きた一世紀近い「時」がはいっています。」と称賛している[16]。子ども時代に邦訳前のこの絵本に出会ったことが翻訳への意欲につながっていったのかもしれない。

長田弘が 70 歳のときに翻訳出版された絵本に、国際アンデルセン賞画家賞を受賞したイタリアの画家 ロベルト・インノチェンティによる『百年の家』がある。廃屋だった家が 1900 年に子どもたちに見つけられてからの 100 年の移り変わりが描かれている。結婚、誕生、戦争、そこで暮らす人たちの喜び、悲しみを見守る家の姿が描かれている。それは、『ちいさいおうち』と同じく、人の営みを 100 年見守ってきた家の絵本であった。

長田弘亡き後、前述の『最初の質問』と同じ画家・いせひでこの絵による『幼い子は微笑む』が出版された。この詩が収録されている詩集『奇跡-ミラクル-』[17]のあとがきにはこう記されている。

> たとえば、小さな微笑みは「奇跡」である。小さな微笑みが失われれば、世界はあたたかみを失うからだ。世界というものは、おそらくそのような仕方で、いつのときも一人一人にとって存在してきたし、存在しているし、存在してゆくだろうということを考える。

言葉を用いて表現してきた詩人が『幼い子は微笑む』の中で、微笑についてこう述べている。

> この世で人が最初に覚える
>
> ことばではないことばが、微笑（びしょう）だ。

2017（平成 29）年、福島県立図書館に寄贈された長田弘全蔵書が長田弘文庫として開設された。長田弘の思索について深く知ることができる貴重な資料群である。詩人・長田弘には詩集やエッセーだけでなく、豊かな絵本や翻訳作品がある。長田弘文庫とともに、読み継いでほしい。

福島県立図書館所蔵　長田弘 絵本・児童文学

長田弘作　絵本・児童文学

出版年	年齢	書名	共著者	出版社	シリーズ名	請求記号		
1974.12	35	帽子から電話です	長　新太/絵	偕成社		913	ｵﾋ	
1996.6	56	ねこのき	大橋歩／え	クレヨンハウス		P	ｵﾜ	
1999.8	60	森の絵本	荒井　良二／絵	講談社		P	ｱﾘ	
2001.6	61	森の絵本　対訳版	荒井　良二／絵	講談社		P	ｱﾘ	
2004.7	64	あいうえお、だよ	あべ　弘士／絵	角川春樹事務所		P	ｱﾋ	
2011.10	71	空の絵本	荒井 良二／絵	講談社	講談社の創作絵本	P	ｱﾘ	
2012.10	72	ジャーニー	渡邊 良重／絵　薗部 悦子／ジュエリー	リトルモア		LA726.7	O3	6
2013.7	73	最初の質問	いせ ひでこ／絵	講談社	講談社の創作絵本	P	ｲﾋ	
2013.9	73	ん	山村 浩二／え	講談社	講談社の創作絵本	P	ﾔｺ	
2016.2		幼い子は微笑む	いせ ひでこ／絵	講談社	講談社の創作絵本	P	ｲﾋ	

長田弘翻訳絵本

出版年	年齢	書名	共著者	出版社	シリーズ名	請求記号		
1993.11	54	クリスマスのおくりもの	ジョン・バーニンガム／さく	ほるぷ出版		P	ﾊﾞｼﾞ	
1994.6	54	ことば	アン・ランド／作　　ポール・ランド／作	ほるぷ出版		P	ﾗｱ	
1995.2	55	いっしょにきしゃにのせてって！	ジョン・バーニンガム／さく	ほるぷ出版		P	ﾊﾞｼﾞ	
1998.10	58	地球というすてきな星	ジョン・バーニンガム／さく	ほるぷ出版		P	ﾊﾞｼﾞ	
1999.7	59	そらとぶいぬ	テッド・ヒューズ／文　デイビッド・ルーカス／絵	メディアファクトリー		P	ﾙﾃﾞ	
2000.9	60	……の反対は？	リチャード・ウィルバー／詩も	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ｳﾘ	
2000.9	60	白バラはどこに	クリストフ・ガラーシ／〔著〕　ロベルト・インノチェンティ／〔著〕	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ｲﾛ	
2000.10	60	おやすみ、おやすみ	シルヴィア・プラス／〔著〕　クウェンティン・ブレイク／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ﾌﾞｸ	
2000.10	60	十月はハロウィーンの月	ジョン・アップダイク／〔著〕　ナンシー・エクホーム・バーカート／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ﾊﾞﾅ	
2000.11	61	アイスクリームの国	アントニー・バージェス／〔著〕　ファルビオ・テスター／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ﾃﾌ	
2000.11	61	夜、空をとぶ	ランダル・ジャレル／〔著〕　モーリス・センダック／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ｾﾓ	
2000.11	61	ジョーイと誕生日の贈り物	マキシン・クーミン／〔著〕　アン・セクストン／〔著〕, イーウリン・ネス/絵	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ﾈｲ	
2001.11	61	私、ジョージア	ジャネット・ウィンター／絵も	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ｳｼﾞ	
2001.11	61	人生の最初の思い出	パトリシア・マクラクラン／〔著〕　バリー・モーザー／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ﾓﾊﾞ	
2001.12	62	いちばん美しいクモの巣	アーシュラ・K. ル＝グウィン／〔著〕　ジェイムズ・ブランスマン／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ﾌﾞｼﾞ	
2002.1	62	子どもたちに自由を！	トニ・モリソン／〔著〕　スレイド・モリソン／〔著〕, ジゼル・ポター/絵	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ﾎﾞｼﾞ	
2002.2	62	魔法使いの少年	ジャック・センダック／〔著〕　ミッチェル・ミラー／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ﾐﾐ	
2002.3	62	おばあちゃんのキルト	ナンシー・ウィラード／〔著〕　トミー・デ・パオラ／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ﾃﾞﾄ	
2002.3	62	リンカーンゲティスバーグ演説	リンカーン／〔述〕　マイケル・マカーディ／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ﾏﾏ	
2002.11	63	父さんと釣りにいった日	シャロン・クリーチ／文　クリス・ラシュカ／絵	文化出版局		P	ﾗｸ	
2003.10	63	世界をみにいこう	マイケル・フォアマン／作・絵	フレーベル館		P	ﾌﾏ	
2003.1	63	旅するベッド	ジョン・バーニンガム／作	ほるぷ出版		P	ﾊﾞｼﾞ	
2003.3	63	みんなのすきな学校	シャロン・クリーチ／文　ハリー・ブリス／絵	講談社	講談社の翻訳絵本	P	ﾌﾞﾊ	
2003.9	63	ハーメルンの笛ふき男	ロバート・ブラウニング／作　ロジャー・デュボアザン／絵	童話館出版		P	ﾃﾛ	
2006.4	66	バスラの図書館員	ジャネット・ウィンター／絵と文	晶文社		P	ｳｼﾞ	
2006.5	66	ルイーザ・メイとソローさんのフルート	ジュリー・ダンラップ／作　メアリベス・ロルビエッキ／他, メアリー・アゼアリアン／他	BL出版		P	ｱﾒ	
2006.6	66	ビアトリクス・ポターのおはなし	ジャネット・ウィンター／絵と文	晶文社		930	ﾎﾟ	
2007.5	67	ちいさなこまいぬ	キム　シオン／作	コンセル		P	ｷｼ	
2008.12	69	なぜ戦争はよくないか	アリス・ウォーカー／文　ステファーノ・ヴィタール／絵	偕成社		P	ｳﾀｽ	
2009.3	69	アンデスの少女ミア	マイケル・フォアマン／作	BL出版		P	ﾌﾏ	
2010.3	70	百年の家	J.パトリック・ルイス／作　ロベルト・インノチェンティ／絵	講談社	講談社の翻訳絵本	P	ｲﾛ	
2011.4	71	この世界いっぱい	リズ・ガートン・スキャンロン／文　マーラ・フレイジー／絵	ブロンズ新社		P	ﾌﾏ	
2011.9	71	めっけもののサイ	シェル・シルヴァスタイン／作	BL出版		P	ｼｼ	
2012.7	72	いつでも星を	メアリ・リン・レイ／文　マーラ・フレイジー／絵	ブロンズ新社		P	ﾌﾏ	

長田弘翻訳児童文学

出版年	年齢	書名	共著者	出版社	シリーズ名	請求記号		
1979.11	39	はしれ！ショウガパンうさぎ	ランダル・ジャレル／作	岩波書店	岩波ようねんぶんこ	933	ｼﾗ	
1992.9	52	はしれ！ショウガパンうさぎ	ランダル・ジャレル／作	岩波書店	せかいのどうわシリーズ	933	ｼﾗ	
1989.7	49	詩のすきなコウモリの話	ランダル・ジャレル／作　モーリス・センダック／絵	岩波書店		933	ｼﾗ	
2007.9	67	エミリ・ディキンスン家のネズミ	エリザベス・スパイアーズ／〔著〕　クレア・A・ニウォラ／絵	みすず書房		933	ｽｴ	

[1] 著者自筆年譜によると「福島大学付属小学校」となっているが、『福島大学教育学部付属小学校百年史』（福島大学教育学部附属小学校創立百周年記念事業協賛会 1980）によると、1949（昭和24）年4月1日には「福島大学福島師範学校附属小学校と改称す」（p.42）とあるため、ここでは「福島大学福島師範学校附属小学校」とした。

[2] 『続・長田弘　現代詩文庫』思潮社 1997 p.102

[3] 「ウソからでたマコト」『一人称で語る権利』平凡社 1998 p. 9

[4] 「最初の友人」『記憶のつくり方』晶文社 1998　p.38

[5] 「自分の時間へ」『記憶のつくり方』晶文社 1998 p.85

[6] 「自分の時間へ」『記憶のつくり方』晶文社 1998 p.85-86

[7] 「木造校舎」『小道の収集』講談社 1995 p.12-13
（「私のふるさと 福島市 木造校舎」『文化福島』1988.12　p.9）

[8] 「もう一度ゆきたい場所」『人生の特別な一瞬』晶文社 2005 p.78

[9] 「もう一度ゆきたい場所」『人生の特別な一瞬』晶文社 2005 p.78-79

[10] 「もう一度ゆきたい場所」『人生の特別な一瞬』晶文社 2005 p.79

[11] 「もう一度ゆきたい場所」『人生の特別な一瞬』晶文社 2005 p.79

[12] 「子どもの本の学校」『クーヨン』2014.03 p.64

[13] 福島におけるアメリカ文化センターについては、『福島の教育 平成28年度』（福島市教育委員会）の「生涯学習・社会教育」に次の記述がある。「昭和27.9　仙台アメリカ文化センター福島分館を福ビル三階に創設」,「昭和32.9 福島市児童館を設置（桜木町）、仙台アメリカ文化センター福島分館を併設」,「昭和47.11 児童館を改築し、児童文化センターを竣工、福島アメリカ文化センターを廃止」

[14] 『ちいさいおうち』バージニア・リー・バートン 著 石井桃子 訳 岩波書店 1954の原書。

[15] 「長田弘年譜」（自筆年譜）『長田弘詩集』角川春樹事務所 2003

[16] 『小さな本の大きな世界』クレヨンハウス 2016 p.12-13

[17] 『奇跡-ミラクル-』みすず書房 2013

（児童資料チーム 鈴木史穂）

福島県関係書誌の紹介・2016

このリストは、当館で所蔵する2016年1月から12月までに刊行された福島県関係の資料のなかで、1つの主題や人物について20以上の文献を紹介しているものを集成した書誌です。(一部の主題は20以下でも収録しています)

主題編と人物編に区分し、それぞれ主題、人名の50音順, 発行年月順に配列しました。なお、主題は検索の便宜を優先して付けましたので、厳密な体系化は考慮していません。

2015年以前発行資料で、「福島県関係書誌の紹介・2015」に未収録のものも併せて集録しました。

特定の主題、人物についての文献リストとして活用していただければ幸いです。

凡 例

主題

⇔関連主題

・（掲載数）項目

「論文名」 編著者 『資料名』編著者 出版者 発行月 項目掲載頁

*備考

主題編

会津藩

・(49)参考文献

『なぜ会津は希代の雄藩になったか』（PHP 新書） PHP 研究所 中村彰彦／著 8 月 p331-334

⇔武家屋敷

・(23)引用・参考文献

『簗瀬三左衛門邸跡 若松城郭内武家屋敷跡 会津若松市文化財調査報告書 第 141 号』 会津若松市教育委員会文化課／編 会津若松市教育委員会 2014 年 3 月 p62

会津坂下町

・(41)参考・引用文献

『亀ヶ森古墳 4 町内遺跡（亀ヶ森古墳）範囲内容確認調査報告書 会津坂下町文化財調査報告書 第 73 集』 会津坂下町教育委員会／編 会津坂下町教育委員会 3 月 p52

安積開拓

・(55)参考文献

『安積開拓全史』 立岩寧／著 青史出版 10 月 p363-365

医学・医療

⇔福島県立医科大学

・福島県立医科大学業績 論文・著書・研究発表等

『福島県立医科大学業績集 平成26年』 福島県立医科大学附属学術情報センター 3 月 p1-619

⇔太田総合病院

・(72)業績 発表論文

『太田総合病院学術年報 第51号』 太田総合病院 9 月 p5-18, 71-72

いわき市

・(36)引用・参考文献

『上野遺跡 2 縄文・古墳時代集落跡と弥生時代土器棺墓の調査』 （いわき市埋蔵文化財調査報告 第 174 冊） いわき市教育文化事業団／編 いわき市教育委員会 3 月 p49-50

・(24)参考文献

『前上ノ山遺跡 丘陵斜面および裾部に形成された異物包含層の調査 いわき市埋蔵文化財調査報告 第 177 冊』 いわき市教育文化事業団／編 いわき市教育委員会 3 月 p72

裏磐梯・猪苗代

・(117)引用文献

「裏磐梯・猪苗代地域の生物多様性とその保全」 黒沢高秀・塘忠顕／著 『裏磐梯・猪苗代地域の環境学』 塘忠顕／編著 福島民報社 3 月 p255-258

尾瀬

・(45)各種啓発資料類

『設立 20 周年のあゆみ』 尾瀬保護財団／編 尾瀬保護財団 3 月 p66-69

火山灰

⇔白川城

・(25) 文献

「附章２　白川城跡火山灰分析業務委託報告書　白河市埋蔵文化財調査報告書 第72集」火山灰考古学研究所／編　『白川城跡』 白河市教育委員会／編　白河市教育委員会　3月　p215-216

看護学

⇔福島県立医科大学

・(74)業績一覧(2015年1月～12月)

『福島県立医科大学看護学部紀要　第18号』　福島県立医科大学看護学部　3月　p43-51

行政資料

・(963)

『福島県立図書館所蔵　県内行政機関発行資料一覧　（平成26年4月～平成27年9月受入）』　福島県立図書館資料情報サービス部地域資料チーム　2015年12月　p3-26

・(27)県執行部資料索引（2～3月分）

『福島県議会資料　平成28年2月～3月号』　福島県議会事務局政務調査課　2月　p182-183

郷土料理

⇔檜枝岐村

・(27)参考文献,その他資料

「食の文化　伝統から前衛まで」関礼子／［著］　『檜枝岐村の民俗　檜枝岐村文化財調査報告書 第3集』　檜枝岐村民俗誌編さん委員会／監修　檜枝岐村教育委員会　3月　p22

考古学

・(133)平成25年度福島県考古学関係文献目録

『福島考古　第56号』　福島県考古学会／編　福島県考古学会　2014年7月　p156-162

⇔会津

・(27)平成24年度福島県考古学関係文献目録（会津地方）

『福島考古　第56号』　福島県考古学会／編　福島県考古学会　2014年7月　p155-156

・(55)福島県

『日本考古学年報　67(2014年度版)』　日本考古学協会／編　日本考古学協会　5月　p166-168

交通

・(36)引用・参考文献

「交通路から見た陸奥南部におけるヤマト政権の地域支配」　荒木隆／著　『福島県立博物館紀要　第30号』　3月　p27-28

⇔八十里越

・(66)文献

『八十里越の道筋　歴史の道八十里越会津と越後の道筋調査報告』　長谷部忠夫／著　5月　p98-100

桑折町

⇔西山城

・(21)参考文献

『史跡桑折西山城跡発掘調査総括報告書　桑折町埋蔵文化財調査報告書 29』　桑折町教育委員会／［編］　桑折町教育委員会　3月　p107

湖沼

⇔猪苗代湖

・(52)引用文献

「猪苗代湖湖底堆積物コア(INW2012)からみた猪苗代湖の形成と年代 」　長橋良隆［ほか］／著　『裏磐梯・猪苗代地域の環境学』　塘忠顕／編著　福島民報社　3月　p29-31

⇔五色沼

・(42)引用文献

「裏磐梯五色沼湖沼群の青色色彩とナノコロイド粒子との関わり 」高貝慶隆／著　『裏磐梯・猪苗代地域の環境学』　塘忠顕／編著　福島民報社　3月　p76-77

昆虫

・(41)引用文献

「福島県と山形県の山岳域に分布するアザミウマ類(昆虫綱:アザミウマ目)」 塘忠顕［ほか］／著 『裏磐梯・猪苗代地域の環境学』 塘忠顕／編著 福島民報社 3月 p182-183

⇔裏磐梯

・(44)引用文献

「裏磐梯地域に見るカニムシの多様性」 大平創［ほか］／著『裏磐梯・猪苗代地域の環境学』 塘忠顕／編著 福島民報社 3月 p170-171

⇔磐梯山

・(33)引用文献

「1888年の磐梯山噴火の影響を受けた場所のオサムシ科甲虫群集(甲虫目:オサムシ科)」 緒勝祐太郎・塘忠顕／著 『裏磐梯・猪苗代地域の環境学』 塘忠顕／編著 福島民報社 3月 p214-215

城郭

⇔小峰城

・(30)引用・参考文献

『史跡小峰城跡 整備基本計画書』 白河市教育委員会／［編］ 白河市教育委員会 3月 巻末

⇔白川城

・(62)引用参考文献

『白川城跡 白河市埋蔵文化財調査報告書 第72集』 白河市教育委員会／編 白河市教育委員会 3月 p131-132

・(35)白川城跡に関する史料

「附章3 白川城跡に関する史料」『白川城跡 白河市埋蔵文化財調査報告書 第72集』 白河市教育委員会／編 白河市教育委員会 3月 p223-232

植生

⇔裏磐梯

・(65)引用文献

「福島県裏磐梯五色沼湖沼群およびその周辺の植物相」 黒沢高秀［ほか］／［著］ 『福島大学地域創造 第27巻第2号』 福島大学地域創造支援センター 2月 p104-106

・(35)引用文献

「文献や資料にもとづく裏磐梯高原泥流上の乾性植生遷移の推定」 黒沢高秀／著 『裏磐梯・猪苗代地域の環境学』 塘忠顕／編著 福島民報社 3月 p141

⇔相馬市

・(44)引用文献

「福島県相馬市小泉川・宇多川河口に震災後新しくできた塩性湿地・干潟の植物相および植生」 齋藤若菜［ほか］／［著］ 『福島大学地域創造 第27巻第2号』 福島大学地域創造支援センター 2月 p85-87

植物

⇔裏磐梯

・(23)引用文献

「裏磐梯高原の葉を失ったイチヤクソウの正体を探る」 首藤光太郎［ほか］／著 『裏磐梯・猪苗代地域の環境学』 塘忠顕／編著 福島民報社 3月 p149-150

書誌

・(87)

「福島県関係書誌の紹介・2015」橋本栄理子／編 『郷土資料情報 No.56』 福島県立図書館 3月 p36-41

・(10)

『書誌年鑑 2016』 中西裕／編 日外アソシエーツ 12月

*会津藩(p3), 朝河貫一(p7), 高村智恵子(p310), 根本彰(p395), 東日本大震災(p416-417), 白虎隊(p421), 福島県史(p429), 福島第一原子力発電所事故(p429-430), 南相馬市(p473), 放射線障碍(p453)の書誌が掲載.

須賀川市

・(153)参考資料一覧

『須賀川市史　8　現代　4　通史編』須賀川市／編　須賀川市　9月　p517-522

・(25)引用・参考文献

『団子山古墳　3　福島県須賀川市団子山古墳第5次調査報告書　福島大学考古学研究報告 第9集』　福島大学行政政策学類考古学研究室／編　福島大学行政政策学類考古学研究室　3月　p26

相馬市

・相馬市は、伊達市・相馬市を見よ

蔵書目録

・(51)福島大学総合教育研究センター受け入れ資料目録(31)（2015.4.1～2015.9.30）

『福島大学総合教育研究センター紀要20』　福島大学総合教育研究センター　1月　p79-80

・(427)購入図書一覧（平成27年度），寄贈図書一覧（平成27年度）

『福島県議会資料　平成２８年２月～３月号』　福島県議会事務局政務調査課　2月　p186-200

大学

⇔いわき明星大学

・(36)教職員名簿（2015年10月31日現在）ならびに業績リスト(2014年11月から2015年10月31日まで)

『いわき明星大学科学技術学部研究紀要　第29号』　3月　p50-61

*業績のなかの論文と著書を掲出

伊達郡

・(26)おもな参考文献

『伊達の昭和　写真アルバム』　いき出版　10月　p279

伊達市･相馬市

・(58)［引用・参考文献］

『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告　3　福島県文化財調査報告書 第509集』　福島県文化振興財団遺跡調査部／編　福島県教育委員会　1月　p11-12，58，80，86，95，124

中世史

・(211)参考文献

『東北の中世史　5　東北近世の胎動』柳原敏昭／企画編集委員　吉川弘文館　3月　p229-241

テレビ映画

⇔ウルトラＱ

・(55)参考資料

『「ウルトラQ」の誕生』　白石雅彦／著　双葉社　1月　p294-295

動物

⇔裏磐梯

・(64)引用文献

「裏磐梯地域に生息する底生動物 」塘忠顕［ほか］／著　『裏磐梯・猪苗代地域の環境学』　塘忠顕／編著　福島民報社　3月　p160-161

西会津町

・(24)参考文献

『近世　山村の暮らし　主に山三郷大谷組高目村』　長谷沼清吉／著　11月　p198

東日本大震災

・(9457)

『東日本大震災福島県復興ライブラリー資料一覧　平成28年3月11日付』福島県立図書館　3月　172p

・(31)参考文献

「震災五年後の災害／戦争の精神分析」樫村愛子／著 『現代思想　第44巻第8号』　青土社　4月　p86-87

⇔いわき市

・(23)参考文献

「東日本大震災復興に向けた組織の現状とその類型」　菅野瑛大・松本行真／著『東日本大震災と被災・避難の生活記録』　吉原直樹／編著　六花出版　2015年3月　p230-232

⇔水産業

・(3729)漁業・水産業における東日本大震災に関する収集情報リスト

『漁業・水産業における東日本大震災被害と復興に関する情報資料集』東京水産振興会／編　東京水産振興会　2015 年 11 月　p71-129

・(27)引用文献、参考文献

「東日本大震災における被災実態の把握と復旧・復興施策のあり方について」『水産振興　第 581 号』　5 月　p60-63

⇔生態学

・(68)参考文献

『生態学が語る東日本大震災　自然界に何が起きたのか』　日本生態学会東北地区会／編　3 月　p186-190

⇔浜通り

・(138)参考文献

『被災コミュニティの実相と変容　福島県浜通り地方の調査分析』　松本行真／著　御茶の水書房　2015 年 2 月　各章末

広野町

・(47)参考文献

『浅見川地区防災緑地関連遺跡発掘調査報告　福島県文化財調査報告書 第 506 集』　福島県文化振興財団遺跡調査部／編　福島県教育委員会　1 月　p10, 66, 85-86, 88

福島第一原子力発電所事故

・(27)文献リスト

『チェルノブイリ 30 年とフクシマ 5 年は比べられるか』　北東アジア研究選書　福澤啓臣／著　2 月　p121-122

・(53)参照文献

『原発避難と創発的支援　活かされた中越の災害対応経験』　高橋若菜／編著　3 月　p210-213

・(169)参考文献

『原子力発電企業と事業経営』　小笠原英司／編著　文眞堂　9 月　p197-205

・(75)参考文献

「第一部　核開発から福島原発事故」『今こそ原発の廃止を』　日本カトリック司教協議会『今こそ原発の廃止を』編纂委員会／編　10 月　p266-269

・(28)参考文献

「第 5 章　危機時のガバナンス」『大震災に学ぶ社会科学　第 3 巻　福島原発事故と複合リスク・ガバナンス』　村松岐夫／監修　東洋経済新報社　2015 年 10 月　p146-148

・(44)参考文献

「第 7 章　原子力発電技術ガバナンスの課題」寿楽浩太［ほか］／著　『大震災に学ぶ社会科学　第 3 巻　福島原発事故と複合リスク・ガバナンス』　村松岐夫／監修　東洋経済新報社　2015 年 10 月　p242-245

・(28)参考文献

「第 4 章　司法と行政の相克 : 弁護団調査からみる福島第一原発事故損害の賠償過程」　大倉沙江・久保慶明／著　『大震災に学ぶ社会科学　第 1 巻　政治過程と政策』　村松岐夫／監修　東洋経済新報社　5 月　p97-98

・(32)参考文献，報告書

「第 7 章　事故調査の政治空間 : 福島原発事故をめぐる 2 つの事故調」田川寛之／著　『大震災に学ぶ社会科学　第 1 巻　政治過程と政策』　村松岐夫／監修　東洋経済新報社　5 月　p155-157

・(24)参考文献

「第 2 章　全町避難・全村避難と地方自治」阿部昌樹／著　『大震災に学ぶ社会科学　第 2 巻　震災後の自治体ガバナンス』　村松岐夫／監修　東洋経済新報社　2015 年 11 月　p70-71

・(118)参考文献

『見捨てられた初期被曝』　（岩波科学ライブラリー 239）　study2007／著　岩波書店　2015 年 6 月　p 117-125

・(61)文献
「福島第一原発の汚染水問題　その地質学的背景と課題 」　柴崎直明／［著］『地球科学　第69巻5号』　地学団体研究会　2015年9月　p278-281
・(20)文献
「福島第一原発の汚染水対策における地下水バイパスへの疑問」　末永和幸／［著］　『地球科学　第69巻5号』　地学団体研究会　2015年9月　p287-288
・(22)文献
「見捨てられた初期被爆 - スクリーニング基準値の引き上げと変質に関する経緯」　study2007／著　『科学　第85巻第3号』　岩波書店　2015年3月　p306
・(22)文献および注
「葬られた津波予測、次々見つかる新事実 」　添田孝史／[著]　『科学　第86巻第3号』　岩波書店　3月　p245
・見出し一覧
『地元新聞にみる原発関連見出し一覧　2011年3月11日～2015年12月31日』　福島県立図書館／編　福島県立図書館　2月　1冊

⇔教育

・(27)参考文献,資料
「第5章　原発事故対応における学校への影響」　阿内春生／著　丸山和昭／著　『大震災に学ぶ社会科学　第6巻　復旧・復興へ向かう地域と学校』　村松岐夫／監修　東洋経済新報社　2015年12月　p149-151

⇔水産業

・(43)参考文献
『福島第一原発事故による海と魚の放射能汚染』　水産総合研究センター叢書　水産総合研究センター／編　2016.3　p25，37-38，58，77-78，126-127，139

⇔農業

・(28)引用文献
「避難指示区域等の営農再開・農業再生に向けた実証研究（第1報）」　鈴木幸雄［ほか］／［著］『福島県農業総合センター研究報告　放射性物質対策特集号　第2号』　福島県農業総合センター　3月　p76-77

⇔双葉町

・(53)参考資料
『なぜわたしは町民を埼玉に避難させたのか　証言者前双葉町町長井戸川克隆』　井戸川克隆／著　駒草出版　2015年4月　p392-396

⇔放射性物質

・(44)参考文献
「第8章　食品中の放射性物質をめぐる問題の経緯とそのガバナンス」『大震災に学ぶ社会科学　第3巻　福島原発事故と複合リスク・ガバナンス』　村松岐夫／監修　東洋経済新報社　2015年10月　p242-245
・(27)文献
「放射性セシウムの化学的考察―風評被害を考える」　金澤等／著　稲田文／著　中村　和由／著　『福島大学地域創造　第28巻第1号』　福島大学地域創造支援センター　9月　p14-15

仏教

・(21)引用・参考文献
「「仙道三十三観音霊場めぐり」の諸問題」　高橋信一／著　『福島史学研究　第94号』　福島県史学会　3月　p110

文学

・(90［人］)都道府県別索引【福島県】
『戦後詩歌俳句人名事典』　日外アソシエーツ　2015年10月　p591
・(355)福島県文学賞
『詩歌・俳句の賞事典』　日外アソシエーツ　2015年12月　p122-132
・(19)福島県自由詩人賞
『詩歌・俳句の賞事典』　日外アソシエーツ　2015年12月　p232

・(54)福島県短歌賞
『詩歌・俳句の賞事典』　日外アソシエーツ　2015年12月　p325-327
・(14)歳時記の郷奥会津俳句大賞
『詩歌・俳句の賞事典』　日外アソシエーツ　2015年12月　p377-378
・(77)福島県俳句賞
『詩歌・俳句の賞事典』　日外アソシエーツ　2015年12月　p404-406
・(325)福島県川柳賞
『詩歌・俳句の賞事典』　日外アソシエーツ　2015年12月　p436-442

方言

・(56)方言論文（資料）：福島
『方言がつなぐ地域と暮らし・方言で語り継ぐ震災の記憶　被災地方言の保存・継承と学びの取り組み　文化庁委託事業報告書 平成25(2013)年度』　杉本妙子／編　茨城大学人文学部　2014年3月　p232-236

戊辰戦争

⇔白虎隊

・(58)参考文献
『白虎隊　PHP文庫』中村彰彦／著　PHP研究所　1月　p283-285

南相馬市

・(538)資料編年目録
『原町市史　第7巻　資料編5　現代』　南相馬市教育委員会文化財課市史編さん係／編　南相馬市　2015年3月　p769-791
・(64)［引用・参考文献］
『農山漁村地域復興基盤総合整備事業関連遺跡調査報告　1　福島県文化財調査報告書 第508集』　福島県文化振興財団遺跡調査部／編集　福島県教育委員会　3月　p14，279-280，188
・(25)主な参考文献
『南相馬に躍動する古代の郡役所 泉官衙遺跡　シリーズ「遺跡を学ぶ」　106』　藤木海／著　新泉社　2月　p93

メンタルヘルス

・(22)文献
「自治体職員におけるメンタルヘルス対策の実践と効果の検証　笑いと睡眠に焦点をあてて」　我妻沙織／［著］　『福島県保健衛生雑誌　第27巻』　3月　p13-14

文書目録

・(533)
『福島県歴史資料館収蔵資料目録　第47集　県内諸家寄託文書』　福島県文化センター歴史資料課／編集　福島県文化振興財団　3月　42p

⇔医学

・(661)
『医家原田家書籍目録　只見町文化財調査報告書 第21集』　［只見町教育委員会／編］　只見町教育委員会　3月　293p

⇔石川町

・(1782)
『福島県石川町史資料目録　第13集　渡辺実氏収集文書旧渡辺直蔵家文書』　石川町教育委員会／編　石川町　3月　121p

⇔郡山市

・(1176)
『郡山市歴史資料館収蔵資料目録　第30集』　郡山市歴史資料館／編　郡山市教育委員会　2015年9月　50p

⇔修験道

・(280)
『修験吉祥院聖教典籍文書目録　只見町文化財調査報告書 第20集』　［只見町教育委員会／編］　只見町教育委員会　2014年3月　190p

⇔福島市

・(2926)中村壮夫家文書目録
『福島市史資料叢書　第97輯　中村家文書』　福島市史編纂委員会／編　福島市教育委員会　3月　p190-265

柳津町

・(22)参考文献
『柳津町』　歴史春秋出版　9月　p102

陸水

⇔会津

・(25)引用文献

「阿賀野川流域の積雪特性と水循環の関係性」　川越清樹／ほか著　『裏磐梯・猪苗代地域の環境学』　塘忠顕／編著　福島民報社　3月　p93

⇔磐梯山

・(24)引用文献

「磐梯山とその周辺地域の地下水,湧水の水質の特徴」　藪崎志穂／著　『裏磐梯・猪苗代地域の環境学』　塘忠顕／編著　福島民報社　3月　p106

⇔湧水

・(21)参考文献

「福島県の湧水、地下水の酸素・水素安定同位体分布特性」　藪崎志穂／［著］『福島大学地域創造　第27巻第2号』福島大学地域創造支援センター　2月　p41

人物編

会田キン

・(12)参考文献・史料等

『日本基督教団矢吹教会の創立者関根要八　関根要八とともに矢吹教会の設立・発展に尽力した山田英太郎・會田キン』　庄司一幸／著　庄司一幸　1月　p54

大須賀清光

・(50)主要参考文献

『大須賀清光の屏風絵と番付』　福島県立博物館／編　福島県立博物館　4月　p94-95

荻生天泉

・(22)参考文献

『特集　没後70年・荻生天泉　関連パンフレット』　堀宜雄／編　7月　［p24］

長田弘

・(28)

『現代日本執筆者大事典　第5期第1巻あ～け』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015年7月　p475-476

開沼博

・(26)

『現代日本執筆者大事典　第5期第1巻あ～け』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015年7月　p508

木村定三

・(23)主な参考文献一覧

『日本聖公会司祭木村定三の生涯と業績』　庄司一幸／著　庄司一幸　11月　p40-41

玄侑宗久

・(30)

『現代日本執筆者大事典　第5期第1巻あ～け』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015年7月　p754-755

後藤　康夫

⇔福島大学

・(76)業績一覧

『商学論集　第84巻第4号　後藤康夫教授退職記念号』　福島大学経済学会　3月　p322-327

小室直樹

・(20)

『現代日本執筆者大事典　第5期第第2巻　こ～な』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015年7月　p93-94

西郷頼母

・西郷頼母は、保科近悳を見よ

佐々木松夕

・(20)参考文献

『奥会津の画師　佐々木松夕』　小林政一／著　ふるさと企画　2015年11月　p139-140

佐藤伝

・(20)

『現代日本執筆者大事典　第5期第第2巻　こ～な』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015年7月　p191

佐藤俊彦

・(24)

『現代日本執筆者大事典　第5期第第2巻　こ～な』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015年7月　p193

下平尾勲

・(21)

『現代日本執筆者大事典　第5期第第2巻　こ～な』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015年7月　p288-289

白河真田家

・(30)参考文献

『一椀の粥　白河真田家の軌跡を辿る』　真田秀男／著　真田秀男　8月　p61-62

人物-福島県

・(663［人］）福島県

『郷土ゆかりの人々　地方史誌にとりあげられた人物文献目録』　飯澤文夫／監修　日外アソシエーツ　2016.1　p83-105

蓁姫（シン）

・(58)主要参考文献

『松平家と松浦家　蓁姫の婚礼調度と松浦家の名宝』　白河市歴史民俗資料館／編　白河市歴史民俗資料館　9月　p77

関寛斎

・(17)主要参考文献

『關寛斎奥羽出張病院日記解読本』　關寛斎／［著］　3月　巻頭

・(37)文献

『関寛斎関係発表文献集　第4巻　奥羽出張病院日記関連資料集』　陸別町関寛翁顕彰会／編　3月

関根要八

・(22)参考文献・史料等

『日本基督教団矢吹教会の創立者関根要八　関根要八とともに矢吹教会の設立・発展に尽力した山田英太郎・會田キン』　庄司一幸／著　庄司一幸　1月　p53-54

高村智恵子

・(46)参考文献

『スケッチで訪ねる『智恵子抄』の旅　高村智恵子52年間の足跡』　坂本富江／著　牧歌舎東京本部　2015年12月　p227

田母神俊雄

・(30)

『現代日本執筆者大事典　第5期第第2巻　こ～な』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015年7月　p574

辻みどり

・(21)業績一覧

『行政社会論集　第28巻第4号』　福島大学行政社会学会／［編］　福島大学行政社会学会　3月　p6-8

角田柳作

・(39)主な参考文献（訂正版）

『角田柳作とドナルド・キーン』　群馬県立土屋文明記念文学館／編　群馬県立土屋文明記念文学館　10月　p58

永山久夫

・(30)

『現代日本執筆者大事典　第5期第第2巻　こ～な』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015年7月　p753-754

南光坊天海

・(770)

『南光坊天海関係文書集』　宇高良哲／編　青史出版　10月　p53，316，50

根本彰

・(24)

『現代日本執筆者大事典　第5期第第3巻　に～わ』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015年7月　p41

野崎洋光

・(30)

『現代日本執筆者大事典　第5期第第3巻　に～わ』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015年7月　p51-52

芳賀竹四郎

・(15)参考文献等

『芳賀竹四郎と大原＝芳賀球菌　知られざる下郷の偉人』　室井強／著　室井強　2014 年 10 月　p154-156

林修

⇔福島大学

・(47)業績一覧

『商学論集　第 84 巻第 3 号　林修教授追悼号』　福島大学経済学会　3 月　p209-211

保科近悳（西郷頼母）

・(22)参考史料・引用文書

『史料が語る、保科近悳の晩年』　佐瀬渉／著　歴史春秋出版　2 月　p239

星野仁彦

・(30)

『現代日本執筆者大事典　第 5 期第第 3 巻　に～わ』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015 年 7 月　p284

南一郎平

・(21)参考文献

『日本三大疏水の父 南一郎平　宇佐学マンガシリーズ 5』　大分県宇佐市／編　梓書院　3 月　[p162]

山田英太郎

・(7)参考文献・史料等

『日本基督教団矢吹教会の創立者関根要八　関根要八とともに矢吹教会の設立・発展に尽力した山田英太郎・會田キン』　庄司一幸／著　庄司一幸　1 月　p54

山田正行

・(21)

『現代日本執筆者大事典　第 5 期第第 3 巻　に～わ』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015 年 7 月　p595

山野目章夫

・(30)

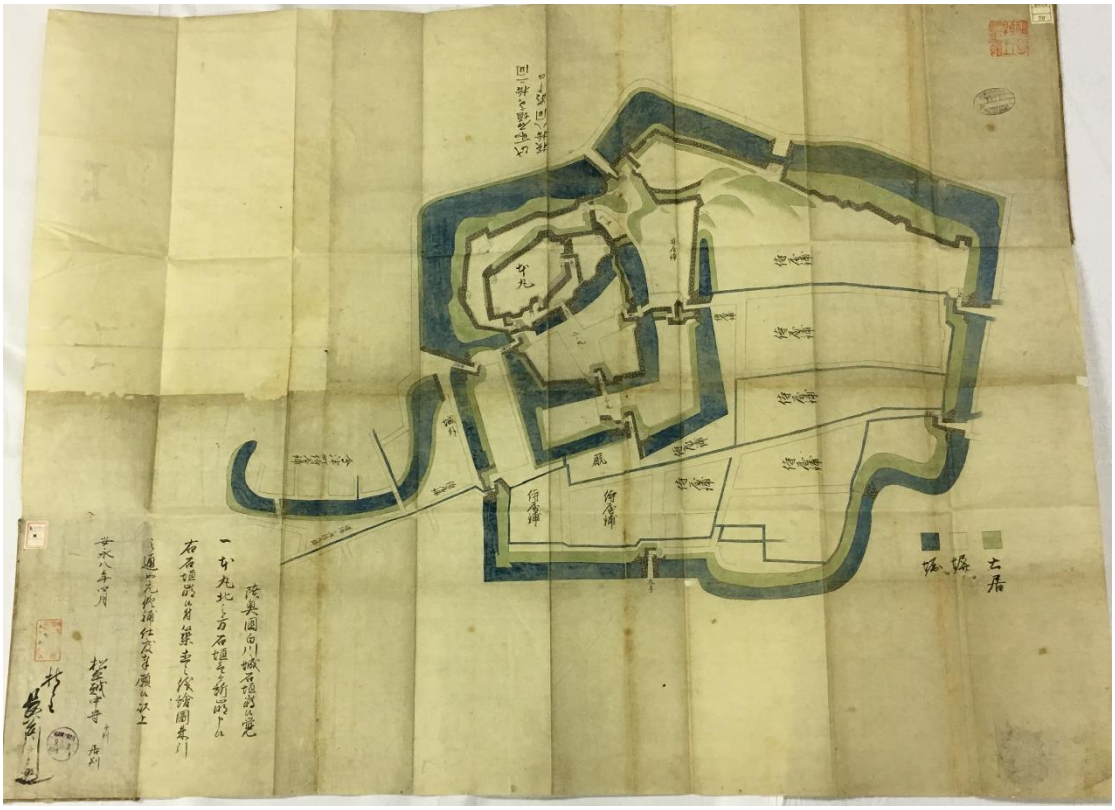
『現代日本執筆者大事典　第 5 期第第 3 巻　に～わ』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015 年 7 月　p606-607

渡部潤一

・(30)

『現代日本執筆者大事典　第 5 期第第 3 巻　に～わ』　紀田順一郎／編　日外アソシエーツ　2015 年 7 月　p725-726

（地域資料チーム　田中信乃）



『陸奥国白川城之図』

==========

福島県郷土資料情報　Ｎｏ．５７

発行日：２０１７年3月７日

編集・発行：福島県立図書館

==========